「猫エイズ」発症のリスクを抑えるポイントは？

「**猫免疫不全ウイルス感染症（FIV）**」と言われる猫の感染症。
発症すると完治はできないけれど、環境を整えることでうまく付き合っていける病気とされています

「猫エイズウイルス感染症（FIV）」って、どんな病気？

おもに**感染猫とのケンカや交尾**などから、免疫機能を破壊する**「猫免疫不全ウイルス」**が
体内に入ることで、口内炎・リンパ節の腫れ・慢性不全・体重減少などの症状を
引き起こす病気です。**発症すると、数カ月～数年で死に至ることも。**

感染経路

それまでなんともなかった愛猫に猫エイズの症状があらわれた場合、考えられる原因は、**猫エイズを発症している猫に「噛まれる」ことによる感染**でしょう。もうひとつの伝播様式としては垂直感染もあり得ますが、主に**咬傷による唾液中のウイルスの水平感染**です。

猫免疫不全ウイルスの感染力は弱いとされています。そのため、猫同士の舐め合いや授乳、家庭で食器などのお皿を共有することによって感染する確率は、低いと言えるでしょう

猫エイズの感染～発症までの流れ

猫エイズの感染～発症までの期間は、個体によって大きく異なります。場合によっては、感染～発症までに10年以上空くことも。

【急性期】軽い発熱や下痢などが見られる時期

ウイルスが体内に入ると、**軽い発熱や下痢、リンパ節の腫れが数週間～数カ月続きます**。
猫によっては、ほとんど症状が見られないこともあります。

【無症候キャリア期】症状が治まり、普通に生活できる時期

この時期の長さは、**1～10年と幅広く、ストレスのかかり具合によって変わります**。しかし、発症まで進まないことも多く、**多くの猫はこの時期のまま発症せずに一生を終えます**。

【PGL期】リンパ節が腫れ、発症のサインが出る時期

感染した直後のように、**再びリンパ節が腫れだすと発症の前兆**。この時期は、**2～4カ月ほどと短い**ので、見逃してしまうこともあります。

【ARC期】免疫機能の低下で、口内炎などの症状が出る時期

ウイルスにより免疫機能が低下し始め、**口内炎、鼻炎、結膜炎、皮膚炎などの病気にかかりやすくなる「エイズ関連症候群」**に。とくに、口内炎がよく見られます。

【エイズ期】免疫機能が機能しなくなり、激しい症状が出る時期

急激に痩せ、貧血が進みます。さらに、悪性腫瘍ができたり、弱い細菌にも感染する**「日和見感染」**を起こし、多くは数カ月で命を落としてしまいます。

※日和見感染（ひよりみかんせん）は、健康な動物では感染症を起こさない病原体（弱毒微生物・非病原微生物・平素無害菌などと呼ばれる）が原因で、発症する感染症である。

猫エイズを「発症させない」ために、飼い主さんができること

猫エイズは、**ストレスが大きく関係**します。
たとえば…**狭いスペースで何十匹も飼っている、トイレが汚いままで、生活をしている**などといったことをしていると、すぐに発症します。
しかし、**清潔でストレスレスな室内飼育をしていれば、発症のリスクを抑える**ことができます。

猫エイズの治療は「対処療法」がメインに

猫エイズには現在、原因ウイルスそのものを退治するワクチンがなく、**対症療法**がメインとなります。
また、症状を和らげるための**緩和ケア**や、**免疫力を上げるための治療**もあわせて行われることが多いです。

栄養バランスのとれた食事、住環境も大切に

猫エイズに感染した猫にとって、毎日の食事と住環境は病気の進行に大きく関わります
栄養バランスのとれた食事で、猫に必要な栄養をしっかりと与えてあげましょう。
基礎体力を良好に保つことで、病気への抵抗力も自ずと高まります。
また、**猫が快適に過ごせる環境を作ってあげる**ことも重要に。
過ごしやすい場所であれば、猫にかかるストレスも最小限に抑えることができます。

猫エイズと上手く付き合っていくために

残念ながら、現在の医学では**猫エイズを発症した個体に対する有効な治療法はありません。**
しかし、**無症候キャリア期の状態においては、猫の免疫力低下を招かないよう**
ストレスのかからない環境をつくることで、発症をくい止めることは十分可能です。
愛猫の様子がいつもと違うと感じたら、注意深く観察するようにしてください。
とくに体調不良で元気がない状態がしばらく続く際には、
早めに病院を受診するほうがいいでしょう。

愛猫の生命力を信じる気持ちを持ち続けて

もし、ステージが進み愛猫が猫エイズを発症してしまった場合、
病院でできることは症状に合わせた対症療法や免疫力をあげる治療のみです。
そのような状態で飼い主さんが何よりも心がけたいのは、「**愛猫の生命力を信じる気持ちを持ち続けること**」。
室内や生活環境をしっかりと整え、最後の最後まで愛情を持って接してあげるようにしましょう。

参考／「ねこのきもち」2016年5月号『子猫や飼い始めは要注意シリーズ②　防げる？　治せる？　付き合える？　意外と知らないねこの5大感染症』
（監修：東京都江東区の猫専門病院　東京猫医療センター院長　服部幸先生）
参考／【獣医師が解説】猫エイズにかかってしまったら？寿命と長生きさせるための最適な治療法